

経路移動時に案内板の情報が与える影響に関する研究

A study about the influence of the information to find from a sign in the case of movement

keywords: information find a sign

設計・情報 宮腰研究室

G044021 上平 雄一

G044022 神谷 明

1. 研究の背景と目的

初めて行く場所や慣れていない場所では、多くの場合、案内板で経路や位置を把握し、目的地に向かう。だが、案内板の情報提示の仕方によって、道を間違えることも少なくない。

人が移動する際、目的地までの経路を細分化し、補助的な目的地（以下:サブ目的地）を設定することで目的地に到達する、ウェイファインディング*1という考え方がある。案内板を見て移動する際にも同様のことが行われていると思われる。本研究は案内板の情報に着目し、案内板の表記が移動時のサブ目的地設定に与える影響を明らかにすることを目的とする。

2. 経路移動時の目印の調査

移動の際に目印や注視しているものを調査した。検証場所は様々な分岐点の経路空間*2が有効であることから、八戸工業大学の学内とした。被験者は、人によって空間を認知する度合いが違う*3ことから校内の経路に関して知識のある男子学生を対象に10名行った。案内の図は、学生要覧に載っているものを用いた。経路は、通行の頻度及び分岐点の数を考慮し、経路1（2F 建築棟ギャラリーー3F 本館法人事務局）と経路2（1F 本館新聞閲覧室ー2F 感性デザイン棟事務室）の2経路とし、指定した経路を移動してもらう際、ビデオカメラを用い、移動の様子を記録する。その後、建物のイメージマップ（図1）を作成してもらう。また、被験者に撮影したビデオを見せて、インタビューにより注視していたものをイメージマップに記載する。

調査の結果（表1）、目印としてイメージマップに記載されていた情報はベンチ、イスとテーブル、自動販売機などの物及びトイレや階段などの特徴ある場所を目印としてイメージマップに記載していた。さらに、トイレや階段、各棟の特徴的な色をつけて記載しているものもいた。案内板では何も記載されていない場所や、記載されていない開口部など、実空間と案内板の

内容が異なる場所では、案内板から実空間のイメージができないといった意見が聞かれた。また、目的地の確認は部屋のプレートの文字を目印にしていた被験者もいた。

以上のことから、移動の際、物の存在や色・形といった表記の差異を注視していることが考えられる。

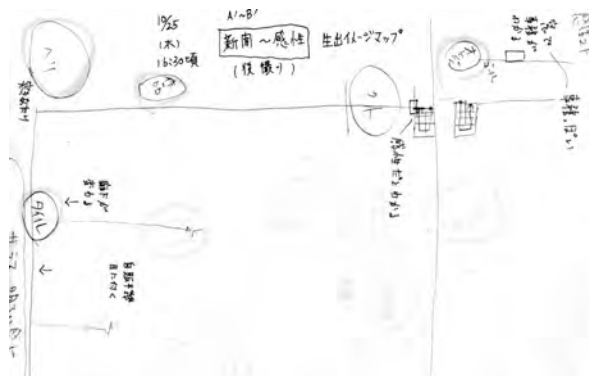


図1 イメージマップ

表1 目印の調査結果

自動販売機	8/10人
ベンチ	9/10人
イス・テーブル	7/10人
トイレのマーク化	9/10人
開口部	10/10人
各棟の色	8/10人
イメージの不一致	5/10人

3. 案内板を用いた経路移動の調査

目印の調査より、案内板の中で注視されているのは、1.物の存在、2.表記の違い、であることから、一般的に見られる案内板について、物の記載状況及び表現を比較した。一般的に見られる案内板は、実空間と関連する色分けが無く、実空間に設置される。ベンチや自動販売機、イスとテーブルという物の情報の記載が無かった。階段、トイレ、エレベーター、出入り口の表記は図として記載されていた。

本研究では、これらのことから、一般的に見られる案内板と同様の特徴を持つ案内板と、物の存在や色、形といった表記を加えた案内板を用い、移動する際に注視する物を比較することで、案内板より抽出される

情報を明らかにする。

2種の案内板を用いた調査は、検証場所を八戸工業大学の学内とし、学内の通路に関して知識のない、20代の男女を対象に10名行った。経路は経路1(2F 建築棟ギャラリー→3F 本館法人事務局)、と経路2(3F 本館法人事務局→3F 新教養等事務局)と経路3(1F 本館新聞閲覧室→2F 感性デザイン専門棟事務室)と経路4(2F 生物環境科学工学専門棟→1F 本館新聞閲覧)の4経路とする。1経路ごとにイメージマップを作成し、被験者に撮影したビデオを見せ、注視していたものをイメージマップに記載する。

イメージマップより、注視していたものを抽出し、目標としていた箇所を数えた(図2)。結果、一般的に、曲がり角や階段、ゴール付近にサブ目的地を設定している傾向が見られた。さらに、自動販売機やイスとテーブルなどの物をサブ目的地に設定している傾向が見られた。これらのことから、経路を記憶する際に経路上に物があるとサブ目的地として有効的な情報になると考えられる。

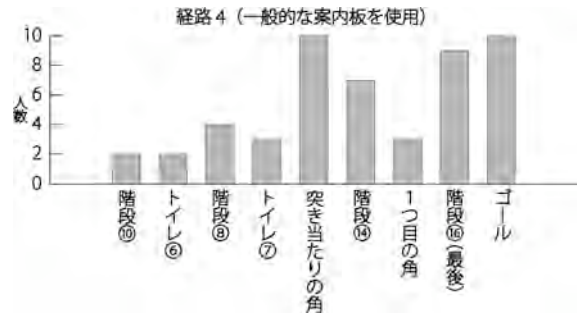


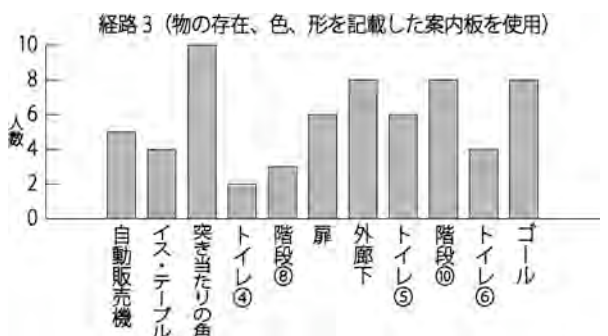
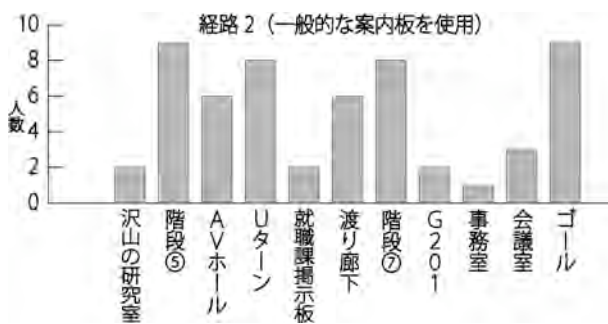
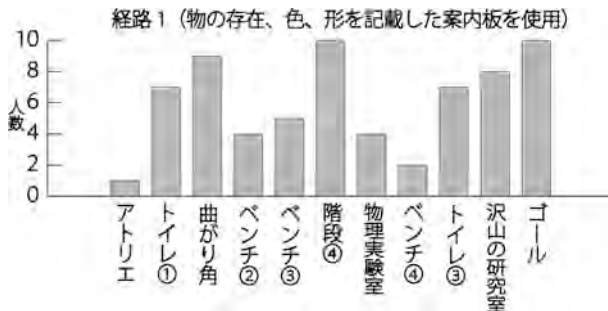
図2 サブ目的地の増減

4.2 種の案内板の比較

インタビューから2種の案内板の比較をした結果を表2に示す。被験者は、案内板から情報を抽出する際、色彩、表記、イメージを手がかりにしている。これらによる内容の掲示方法が、移動時の案内板の情報確認、経路の判断、新たに経路を組み立てるといった過程において影響を与えると考えられる。

表2 2種の案内板の比較

一般的に見られる案内板		
イメージ	就職情報コーナーのイメージが出来ない	8人
	AVホールのイメージが出来ない	7人
色彩	この案内板だと迷いが生じやすい	6人
表記	強調されている箇所が少ない	3人
	外や廊下の表記が無く分かりづらい	5人



物の存在、色、形を記載した案内板		
表記	外の表記があり分かりやすかった	10人
	マークの情報を瞬時に読み取れる	10人
	物が曲がる目印になる	8人
	実際にあるマークで分かりやすい	8人
	階段やベンチの数を数えやすい	5人
色彩	色を使っていて分かりやすい	9人
イメージ	写真がありイメージしやすい	7人

5. まとめ

以上のことから被験者は、目的地まで経路を覚える際に、曲がる地点や階段を上がる場所付近を目印やサブ目的地に決めていた。目印やサブ目的地に設定していた案内板の情報とは、実空間のイメージ、物の表記、記憶や印象に残るものである。これらは、移動時や道に迷った時、目的地にたどり着くために必要な案内板の情報確認、経路の判断、新たに経路を組み立てるなどの思考に影響を与えていると考えられる。

参考文献

- 1) 環境と空間 高橋鷹志 長沢泰 西出和彦 1997年 pp.119-123
- 2) 経路空間の関する空間形態及び行動形態の考察 太田秀俊、箕雄平、八重樫直人、伊藤邦明 1996年 学術講演梗概集 F-1 pp.401-402
- 3) 空間把握の個人差に関する研究 岩崎希子、大井尚行 2000年 学術講演梗概集 D-1 pp.797-798
- 4) 複数の曲折を含む経路を移動する際の方向把握に関する研究 添田昌志、大野隆造 2004年 学術講演梗概集 D-1 pp.903-904